

# 「国際エチオピア学会」の回顧と展望

福井勝義

国際エチオピア学会は、1959年第1回の会議がローマで開催されて以来、原則として3年ごとに世界の各地で開催され、3回に一度の割合でエチオピアの首都アジスアババで開催されてきた。特定の国家および関連のある周辺地域を対象とした歴史ある国際学会は、アフリカはもとより世界でもそう多くはない。それは、地理・歴史・文化的などの面において、エチオピアが特有な位置を占め学問領域を深めてきたばかりではなく、一度エチオピアを訪れた者に深い愛着をいだかせるものがあったから、ともいえる。

## 「国際エチオピア学会」の特徴

国際エチオピア学会には、大きくつぎの3つの特徴がみられる。

### 1) 「会員制の組織ではない」

学会のメンバーが会費などによって規制されていない、きわめて柔軟性に富んだものである。したがって、開催の案内状を送る相手先が特定されないことになる。第13回の大会では、ミシガンで開催された第12回の送付先をもとに第1回の案内状を送った。その送付先は、計1,500人以上にもものぼるが、それぞれの分野は、先史・考古学、歴史学、言語学、文化人類学を含むじつに多岐にわたる人文社会学系の研究者を主要な対象としたものであり、全体をみわたすのは至難の業であった。送付後しばらくして、個人的に親しくしていた著名なエチオピア研究者の名前がもれていたりしてお叱りをうけたこともあった。今回の大会を契機に、会員制の学会組織をつくらうという提案がなされたことは、歴史的意義が大きい。

ただし、この国際学会には、学会を統括する機関として「国際委員会」がある。アジスアババ大学のエチオピア研究所が、その事務局役割をこれまで果たしてきた。現在の国際委員会は、エチオピア(2名)、アメリカ、イギリス、フランス、イタリア、ドイツ、スウェーデン、

ノルウェー、ロシア、イスラエル、日本の11カ国の代表から構成されている。日本は1991年の第11回大会から国際委員会の構成員として、また第13回大会ではノルウェーがあらたにくわえられた。

国際委員会の会合は、通常3年に一度おこなわれる大会の開催前日と最終セッションの前におこなわれる。大会前の会議では、プログラム全体にわたるコメント、委員の選出や国際委員会の運営に関する方針が検討される。また最終セッション直前の会議では次回の開催地が決定され、最終セッションが終わった後のビジネス・ミーティングで参加者全員に発表される。その会合の議長は、慣例として開催国の委員がつとめることになっている。

本大会においては、福井が議長となり、以下の2点に関する合意をみた。1. 2000年の11月は予定どおりアジスアババで、2003年はドイツのハンブルグ大学で開催される。ドイツの開催地に関しては、ハンブルグ以外の候補をあげる研究者がいて一時せりあうような光景もみられたが、開催を招待するハンブルグ大学学長の公式な手紙が有効にはたらいた。2. エリトリアは、独立した以上もはや国際エチオピア学会の対象とはしない。これに関しては、ずいぶん異議がだされたが、エチオピア側がゆずらなかつた。そのほか、最終セッション「エチオピア研究の将来」の発表とコメントに関し、国と分野のバランスを保つよう要請があった。

### 2) 「大会は主催者側によって特徴づけられる」

これまでの大会でとりあげられていたセッションの分野は、主催者によって大きく異なっていた。それは、さきにもべた会員制でないことにもよるが、主催者側の研究者の専門領域、その人的ネットワークや予算の問題とからんでいる。日本では、アフリカ学会などをはじめとして自然系と文系の研究者の交流がさかんだし、エチオピアを対象としては霊長類や栽培植物の多様性に関する研究が積み重ねられてきた経緯がある。主催者側の「権限」として、国際エチオピア学会史上おそらくはじめてこうした

自然系の分野をとりいれることになった。最終セッションで、分野をひろげすぎたとのコメントが一人の歴史学者からだされたが、学際的なエチオピア研究を背景に、農業や環境といった境界領域の課題に接近することができたのではないか、と思っている。

### 3)「30人ほどのエチオピア人研究者を招聘する」

大会の主催者は、およそ30人ほどのエチオピア研究者をエチオピアから招聘しなくてはならない。これは、慣例であり、開催する場合の条件にもなっていた。主催者側にとっては、予算面でじつに頭が痛い。しかし、私たちのようなエチオピア外の研究者は、エチオピアを研究対象としてエチオピアのもつ自然・文化資源の恩恵にあずかっているばかりではなく、さまざまな形でエチオピアにはたいへんお世話になっている。何十年に一度こうしたご「恩」に報いることは当然と思われる一方、こうしたエチオピア研究者の招聘は学問をこころざす若いエチオピア人にとって大きな励みにもなる。今日エチオピア人研究者が他のアフリカ研究者にくらべて国際的に活躍しているのも、長年にわたる国際エチオピア学会の開催と無縁ではあるまい。

### 一通の手紙

日本で国際エチオピア学会を開催することなど、1980年代の前半までまったく想像することもできなかった。1984年第8回国際エチオピア学会がアジスアババで開催されたとき、私が大会に参加し発表したのは、日本人でただ一

人、大会史上はじめてのことであった。当時のエチオピア研究における日本は、そんな孤立的状況であった。ただ、この大会のおり、私は、エチオピア研究所と近い将来どのように共同プロジェクトをもつことができるか、いくにんかの関係者に打診した。スーダンとエチオピアを対象とする文部省の科学研究費を申請しようとしていたからである。

幸運なことに、私たちの調査計画は1986年度の予算プロジェクトとして認められた。プロジェクトの班員であった重田真義君たちは、1986年の夏にエチオピアに向けて出発した。まだ20代だった宮脇幸生、松田凡もこのときのメンバーであった。栗本英世君は、当時AA研の所員で2年間スーダン南部で調査していたが、のちに本プロジェクトに参加した。

さて、1986年の秋に、第9回国際エチオピア学会がモスクワで開催されることになっていた。私は、モスクワ大会に参加する直前、エチオピアの歴史家リチャード・バンカースト博士から一通の手紙をいただいた。その趣旨は、将来日本で国際エチオピア学会を開催することができないかという打診であった。具体的には、8年後の1994年かその2～3年後の1996～7年だ、という。バンカースト博士は、エチオピア研究所の初代の研究所長であり、いまなお活発な著作活動をおこなっている。

文部省の学術予算をいただき現地でも調査できる体制ができたことは、国際エチオピア学会にむけて大きな可能性を与えてくれた。じっさい、それから10年あまりたって、第13回国際エチオピア学会を遂行していくうえで、本プロジェクトの班員たちがどれだけ大きな機動力を果たしていたか。

### 【写真】

国際エチオピア学会国際委員会（敬称略）。  
前列左より、福井勝義、B. ネグシエ（スウェーデン）、O. カベリウック（イスラエル）、M. ライト（露）、アブドゥサマド（エ）。  
後列左より、タダセ・ベリソ（エ）、U. ジークベルト（独）、S. ボーセワン（ノルウェー）、P. マラセーニ（伊、代理）、H. マーカス（米）、J. メルシエ（仏）。



いずれにせよ、これだけの大きな国際学会を日本で開催する可能性を私が勝手に判断できるものではない。私は、バンカースト博士からの手紙をもとに、梅棹忠夫・河合雅雄両先生に相談した。不思議なことに、その瞬間をいまでもよく覚えている。梅棹先生は、「それは、やらんといかんやろうな」とつぶやくようにおっしゃった。また、河合先生に電話でお話したときは、「わしはそんな先まで生きているのかな」ということばが最初であった。両先生の前向きの反応は、私の中で「やろう」という気持ちを増幅していった。

モスクワでは、国際委員会の正式な議題にはならなかったものの、非公式ながらも将来日本で国際エチオピア学会を開催する可能性があることが話題にのぼった。この大会における日本の参加者は、まだ私一人であった。1988年の夏、第10回国際エチオピア学会がパリで開催された。その夏は、イタリアのボローニャにおける国際農村社会学会や旧ユーゴスラヴィアのサラエボにおける国際人類学・民族学会が開催された。ところが、招聘されていた国際農村社会学会の開催直前に盲腸を患い、その3つの大会の参加をすべて途中でキャンセルすることにした。パリ大会において、結局日本人が参加したという情報を耳にしなかった。

#### 深まるエチオピア人研究者との交流

私たちの文部省プロジェクトとは別に、筑波大学の佐藤俊さんがエチオピアとケニアを対象とした国際学術調査を開始する一方、言語学の中野暁雄さんや柘植洋一さん、宗教学の山形孝夫さんたちがそれぞれエチオピア調査に参加した。また、河合雅雄先生を中心とした霊長類の研究者（庄武孝義・森明雄さん）たちも、継続してゲラダヒヒなどの調査をおこなった。

この1980年代の終わりから1990年には、日本とエチオピア研究者たちとの交流の大きな展開期があった。ひとつは、国際交流基金や文部省予算によるエチオピア研究者の招聘である。とりわけ歴史学の分野で活躍しているタダセ・タムラット教授、メリッド・アレガイ博士、パブル・ザウア博士、また当時のエチオピア研究所長で言語学者のタダセ・ベイエネ博士や民

族学のギルマ・キダネ博士が短期間ながら訪日し、日本アフリカ学会などで記念講演をおこなった。彼らの訪日は、欧米とは異なったあらたな世界の発見につながっていったようである。

国際交流基金による招聘は、駐エチオピア日本大使館の推薦によるものである。当時の伊藤忠一大使には私たちの研究交流に深い理解を示していただいた。アジスアベバ大学の学長をはじめ主要な研究者30名近くをヒルトン・ホテルに招き、日本との学術交流の記念すべきパーティを大使館主催でやっていただいたのも、伊藤大使時代であった。他の外国大使館では、こうした学術交流を促進する公的機会が多いように聞いているが、私の知るかぎりこのときがはじめてである。伊藤大使は、そのほか個別に大学関係者を公邸に招き、学術交流にたいへんな関心を示された。また、同大使からは、「エチオピアを対象とした学会をつくってはどうかね」という話をよくうかがった。しかし、そのような学会の設立など当時の私には空想にしかはびびりなかった。

#### 「日本で開催する準備を始めます」

1991年4月第11回の国際エチオピア学会が、アジスアベバで開催された。この大会ではじめて、複数の日本人研究者が参加し発表した。彼らは、若き重田君や宮脇幸生君たちであった。

この大会の国際委員会で、日本がその一員になることが決定され、私がおその指名をうけた。同時に、1997年に日本で第13回国際エチオピア学会を開催するよう同委員会から正式に要請された。私は、重田君たちと相談し、とにかくその開催に向けて準備するよう宣言文を作成することにした。大学のレストランで、私がつくった7行ばかりの英文を、重田君のほかに、宮脇君、調査をはじめた東京大学大学院生の石原美奈子さんに一字一句チェックしてもらった。緊張していたのか、そのときの光景をいまでも鮮明に思い出すことができる。

大会の最終セッションは、大学本部の広い講堂で開催された。およそ400人ほどの聴衆を前に、私はその宣言文を読み上げて、深々とお辞儀をした。日本における開催を期待してくれた

のか、エチオピアと同様のお辞儀に共鳴してくれたのかわからないが、みなさんから割れるような拍手をいただいた。こうして開催の準備の宣言をしたものの、その準備をどのようにすすめていくのか、私の頭にはなんら具体的なアイデアはなかった。

大会の最後には、当時のメンギスツ大統領が登場し、エチオピア研究功労者の表彰式をおこなった。その後、参加者一同、大統領主催のレセプションに招待された。場所は、かつてハイレセラシセ皇帝が使用していた宮殿である。メンギスツは亡命したのは、それから一月ばかりたってからであった。

#### 「日本で開催するなら1億円の準備を」

要は、資金である。帰国してまもなく開催された日本エチオピア協会の総会に、私は出席した。ほとんど理事ばかりの会議であったが、嶋田影章事務局長のとりはからいで、日本における国際エチオピア学会の開催を要請されていることを報告し、その協力をお願いした。席上、開催の母体をどうするか、というご指摘をいただいた。

私は、先のアジスアベバで開催された第11回大会で、近い将来国際エチオピア学会の開催を日本側に要請されるかもしれないと思っていた。なんとか資金繰りに関し、見通しをつけておかなければならない。日本エチオピア協会副会長瓜生復男さんや嶋田さんにご相談した結果、日本エチオピア協会会長の福本栄治さんを訪ねることになった。瓜生さんには、わざわざ東京からおこしいただき、一緒に大同生命の会長室にお訪ねしたことがある。福本会長は、当時私が作成した7000万円の予算をもちこんだ企画書をご覧になって、「日本で開催するんだったら、1億円だなあ」と笑顔でお話になった。まだバブルのはじける前だったのか、資金繰りの前途は明るく感じられた。

#### 日本ナイル・エチオピア学会の設立

こうした国際エチオピア学会の開催準備とはまったく別個に、私は1991年度から国立民族学博物館で共同研究を組織していた。そのタイトルは「北東アフリカにおけるエスノシステム

の実証的研究」というもので、北東アフリカおよびその周辺地域を対象にした人文社会学系の研究者およそ20人ほどの集まりであった。その趣旨は、これまでの個別の民族社会をこえた複数の民族の相互関係を体系的に研究していこうとするもので、それぞれの具体的な事例をもとに検討していくことであった。

研究会をすすめていくうちに、この地域を対象として学際的な学会をつくらうではないか、という気運が盛り上がってきた。研究会がおわると、別に時間をもうけて世話人会を開いた。どのような特徴をもち、どのような方々に協力をもとめ、どなたに発起人会の代表をお願いするか、といった理念的なことから技術的なことまで丹念につめていった。

発起人会の代表者は、学会の準備委員長であり、学会が設立されたあかつきには、もっとも有力な学会長の候補になる。自然系と文系をふまえ、対象地域における多年の貢献者であり、しかもアクティブである、といったよくばった私たちの願いにかなう方は、そういらっしゃるものでない。世話人会のメッセンジャーとして、私は犬山に河合雅雄先生を訪ねてお願いすることになった。1992年3月28日(土)、東京神田の全電通労働会館で設立記念講演会が開催され、河合雅雄先生を初代会長に「日本ナイル・エチオピア学会」が誕生した。

#### 開催前まで資金繰りの見通しつかず

日本ナイル・エチオピア学会が設立されても、1997年に予定されてる国際エチオピア学会の開催はその学会活動のひとつのプロセスでしかない。1994年にミシガン州立大学で開催された第12回大会までには、資金的な見通しをなんとかつけておかなければ、というあせりと裏腹に、日本は経済的不況に見舞われていった。ミシガンで開催された国際委員会で、第13回国際エチオピア学会の開催地は日本とあらためて決定されたが、その時点で資金的見通しはまだなにもたっていないかった。

日本の景気は、回復していくどころか、ますます落ち込んでいった。1996年4月21日、東京都立大学における日本ナイル・エチオピア学会の総会において、組織委員長として河合雅雄

先生、実行委員長として福井がきまると同時に、本学会が第13回大会の主権になることが正式に了承された。

資金繰りのめどは、なおもたっていない。その過程でしだいに明らかになってきたことは、学会という名目では財団にしても企業にしても助成や寄付行為がたいへんむずかしい、ということであった。ひとつの学会に応ずれば、別の学会から芽づる式に依頼されることになる、というのがその理由である。ひとつひとつ企業にお願いして5千万円規模の資金を集めるのは、なみたいていのことではない。当初は大口をねらったが、はずればゼロ、時間だけが過ぎていった。文部省科学研究費補助金や日本万国博覧会記念協会など、こまめに申請書をだしていったのが、1996年も暮れようとしていたころであった。

このきびしい状況のなかで、「予算をできるだけ絞れ」という河合先生の指示ではじいた総予算が、募金趣意書にある4,350万円である。経済界から、なんとか寄付をお願いしていただけないか。趣旨を理解していただける財団は、ないものだろうか。日本エチオピア友好議員連盟の奥田敬和会長や二階俊博事務局長の議員室に、嶋田さんとご一緒におじゃましたこともあった。

きびしい不況のなかで、「どうしてエチオピアですか」という問いかけをされると、そのつど答えに窮した。おりしも、国際エチオピア学会の開催時期である1997年12月は京都で地球温暖化会議が開催されることになっていた。経済界を含む世間の目は、エチオピアどころではなかった。

#### 協力していただく組織体制は

組織はできるだけ単純な方がいい。しかし、できるだけ多くの方々の協力をえて成功裏に終えるためには、それなりの組織と手続きが必要である。かつて日本エチオピア友好議員連盟の二階俊博事務局長が運輸政務次官だったころ、私は企画書をもって次官室を訪ねていった。「この企画書は、主催者側のことだけしか考えていない。協力をお願いする相手側のこともよく考えては」というご助言をいただいた。

そうした配慮を国際エチオピア学会の組織にどのようにいかすことができるのか、またたくまに3～4年がすぎた。その結果は、瓜生さんの「特別顧問と顧問にわける」というアイデアに依拠することになった。特別顧問、顧問にかぎらず、すべて依頼書を作成して発送するなり、あるいは直接おじゃましてご挨拶するのが礼儀である。ありがたいことに、お願いしたほとんどの方からご快諾をいただいた。

時間がたったものの、こうして組織体制が確定しはじめて、公的な募金体制ができた。そして組織委員会が正式に開催されたのは、開催年のおよそ5ヶ月前のことである。組織委員会前日の7月24日時点における参加申込者は357名(計26カ国)、アブストラクト提出者は124名、論文提出者数は68名であった。開催は刻々とせまっていたが、資金の見通しは文部省、日本万国博覧会記念協会などの内定があるだけで、総募金額の3分の1程度であった。ありがたいことに、日本ナイル・エチオピア学会には高島基金がある。その一部300万円の運転資金があったからこそ、遅ればせながらも大会の運営・準備活動ができた。

#### 開催時期と会場

開催時期は、1997年ということだけ国際委員会決定されていたが、どの月にするか。日本では4月と11月がベスト・シーズンかもしれないが、4月では学期の始まりとまだ準備不足、11月では観光シーズンでホテルは割高である。海外の参加予定者に聞くと、各自それぞれ都合のいい時期をいう。結局、ホテル側のアドバイスや公開講演の日取りを考慮して、12月12日(金)～17日(水)と決定した。前年1996年の同じ時期に東山など歩きながら、紅葉の散り具合をみていた。その年は、意外とはやく散ってしまったが、さいわいなことに本番の開催時期は最後まで紅葉は残っていた。

開催場所を京都に決定するまで時間がかかった。なにより経費がかさむのを恐れたからである。ミシガンにおける第11回大会のときに、「だれが物価の高い日本に行くか」という話をよく耳にした。ホテル代と会場費は、なんとか安くあげたい。さらに環境のいいところがベス

トだ。いくつか足を運んであたってみたが、会場、宿泊経費そして環境という3拍子がそろうところは京都でもそうない。結局以前から知り合いの「ホテルサンフラワー京都」に決定した。会場は、ホテルとあわせて南禅寺の近くにある国際交流会館を予約した。しかし、気分転換に歩いてほどほどの距離に2会場をもうけたものの、「関心のある発表が聞けなかった」という不満の声をあとで聞いた。ホテルサンフラワーでは、伊豆真一総支配人をはじめ、従業員の方からいろいろ細かなご配慮をいただいた。成功裏に終わる大きな条件は、雰囲気である。この機会をかりて、厚く御礼を申し上げたい。

#### 直前まで参加者がきまらない

しかし、エチオピアの研究者を何人招聘することができるのか、1997年8月アジスアベバを訪れた私は、エチオピア研究所長に約束しなければならない。薄氷を踏む思いであった。所長は、なんとかして2名の補欠を認めてくれないか、という。予算が許すか、保留だ。

およそ30人の割引航空賃は、どこまでやすく入手することができるか。飛行場にエチオピア航空のゼネラル・マネージャーを訪ねたものの、「こちらはビジネスですから」という反応でしかなかった。それならこちらも、他の航空会社を選ぶ可能性だってある。エチオピア側は、なにより一人でも多く招待してほしい、という。しかし、結果的にヒルトン・ホテル近くの旅行会社でエチオピア航空の割安券を入手できることになった。

さらに、エチオピア国籍ではないため30人の招聘予定者からはずされていたりチャード・バンカースト博士をはじめ、日本人研究者がお世話になった歴代のエチオピア研究所長をぜひお招きしたい。一方では、特別セッションの基調講演者を招待しなければならない。しかし、既存の予算の枠からすると、とうぜんオーバーする。ほかの予算を使用できる可能性はないか。結果的に、海外から招聘したのは、エチオピアから38名、国際委員7名、基調講演者2名、映画関係者3名の計50名であった。また、特別セッションの参加者など13名については、旅費・滞在費の一部補助をおこなった。このほかにも、日本人参加

者が個人的に招待した外国人参加者も若干名いる。

#### 事務局の相補体制

本大会を進めていくうえで、事務局には予算の調整、参加者との連絡、日程・会場、プログラムの企画調整や報告書の作成といった盛りだくさんの「業務」をこなさなくてはならない。基本的に、前者を福井研究室で、後者を重田研究室で担当することになった。二つの研究室は、まるで両輪のように「大会の開催」という軸のもとに走っていった。

資金がなければ行動できないのは当然であるが、プログラムの調整があつてこそ実のある大会が実現する。私の研究室から自転車で5分のところに、京都大学アフリカ地域研究資料センター重田研究室がある。重田君は、国立民族学博物館の栗本君と密接な連絡をとりながら、発表希望者のアブストラクトをもとにプログラムを調整する作業と報告書の作成を分担した。

開催直前まで、発表希望や中途の発表辞退者などの情報がつぎからつぎに飛び込んでくる。それらを複数のセッションと会場をにらみながら、プログラムの原案を作成していくことは、至難の業である。一方、私たちは、大会後にすがすがしく解散するために、1994年のミシガン方式を採用し、開催前に「プロシーディング」を出版することを目標とした。発表者のフルペーパーの数がなかなかつかめない。開催2ヶ月前の9月下旬になつても、追い込み原稿が届いたりした。

私たちは、最終的に印刷費を最小限にするために、パソコンをフルに使ったDTP方式をとろうとした。それだけ重田研究室では、完全原稿をもとに版下まで作成するという想像を絶する「業務」をこなすことになった。英文のブラッシュアップに関しては、イギリス国籍でアジスアベバ大学の講師アルラ・バンカースト博士にお願いしたものの、DTP形式で短期間に印刷所に渡すために、学生のボランティアを含め、多くの若い人が夜を徹した。

#### 一般の方々の参加を

将来ふたたび開催できるかわからない国際エチオピア学会である。この機会に、どれだけ一



[写真] 公開講演であいさつするマフディ・エチオピア大使。

で自分の作品を見てもらいたい、という願いの手紙がきた。この企画を公開にすれば、エチオピアの歴史と現状をひろく理解していただく格好の機会ではないか。これは、京都大学フィールドワーク研究会の学生有志が率先して担当することになり、多くのエチオピア研究者が参加して、活発な議論が展開された、と聞いている。

般の方に関心をもって、エチオピアの文化や学術研究を理解していただくか。

1986年から私たちのプロジェクト・メンバーであった松田凡君は、民族舞踊の専門家であり、かつ彼の奥さんである遠藤保子（立命館大学助教授）さんと、この国際エチオピア学会の開催にあわせて、エチオピアのダンサーを招聘する予算を国際交流基金に申請していた。さいわいに旅費が認められ、この学会とは独立した組織のもとに、募金をつのりながら実現化していった。大会の歓迎レセプションでエチオピア舞踊のパフォーマンスをやりましょう、という松田君の提案のもとに、私は和太鼓との競演のお願いをした。それは、将来わたるエチオピアと日本のシンフォニーを醸し出すような雰囲気をつつまでも残した。

一方、本大会の学会の事業として、二つのことを企画した。ひとつは、公開講演である。関心をもっていらっしゃる一般の方にも、できるだけ参加して、エチオピアのもつ学術的特徴を理解していただきたい。日本側とエチオピアを含む海外参加者のバランス、ならびにそれぞれの分野の特徴が短時間にできるだけ伝わるような企画をたてるにはどうしたらよいか。女性の研究者にこの公開講演にぜひ参加していただくという、大会の組織委員会のアイデアはよかったものの、お願いしたエチオピア女性研究者の発表内容はあまりにも政治的すぎた、とのきびしいお叱りを、とくにエチオピア人研究者からうけた。

もうひとつは、エチオピア映画祭である。エチオピア出身で在米の映画監督から、ぜひ大会

私なりに総括すると

開催1年半前から、資金繰りや海外の参加者の対応を含めて、重田研究室と私の研究室は、「国際エチオピア学会」という戦場の前線基地であった。その後、およそ2年あまりたった。私なりにその結果を主催者側と参加者側の反応にわけ、いくつかの点にわたって総括してみたい。

#### 1) 主催者側からみると

##### (1) 組織づくりが遅すぎた

日本学術会議など、さまざまな財団・企業への助成・寄付申請をするためには、開催の3年前には組織体制を整えておくべきであった。

##### (2) 資金繰りは大口の賭けよりこまめな助成・寄付の申請を

大口の寄付を期待するのはけっこうだが、それにもみ焦点を絞ってしまうと、失敗したときの後遺症が大きい。面倒かもしれないが、やはり着実なこまめな申請を。年度によって若干の申請形式が異なることもあるが、これまでの手続きから事前に申請の時期などを含めた資金繰りのスケジュールを少なくとも開催の2年前には作成する。学会形式では申請の認可が難しい場合が多く、可能なかぎり多様な申請の仕方を考える。予算の見通しがなければ、あたりまえのことだが他の計画をすすめられない。

##### (3) 学術的意義だけの募金はむずかしい

経済界は、事業が近い将来の景気に結びつくか、企業のイメージアップに大きくかわるようであれば、大口の寄付に応じてくれるかもしれない。国際エチオピア学会では、そうした見

# COME TO KYOTO INTERNATIONAL CONFERENCE OF ETHIOPIAN STUDIES



[写真] サヨナラ・パーティのスピーチ。ネグシエ博士とエンダシヤウ博士。

が大切である。このことは、今回の大会で学んだ。なによりも、参加者の病気や事故がなかったのがさいわいであった。

## (6) プログラムの4レベル

学会では通常、「プログラムの4レベル」が考えられる。4つのレベルとは、公開講演のようなフォーマルなもの、参加者による個別の研究発表、焦点を絞った特別セッション、そして参加者全員が楽しめる懇親会である。本大会では、フォーマルなものは最初の公開講演と最後

のセッション「エチオピア研究の将来」である。焦点を絞った特別セッションは、「エチオピアにおける土着の持続的農業システム」と「エチオピアにおける中心と周辺の再編成1974-97年」である。このような特別セッションが多すぎると、それに参加・発表できなかった人の不満がでてくる。一方、学術大会の成功度は、懇親会の充実度でしばしばはかれる。参加者がなごやかに交流できることは大会の大きな目的であるが、この点に関してはまちががなくみなさんに満足していただいたと思う。

通しは皆無に近い。あとは、さまざまなネットワークによる協力をお願いするしかない。あたりまえのことかもしれないが、人的関係が重要なことをあらためて痛感した。今回も、そうした深いつながりをもっておられる方々にたいへんお世話になった。いつかお名前をあげて、あらためてお礼を申し上げる時期がくれば、と思っている。

(4) 発表者の申請は少なくとも6ヶ月前に厳重に締め切る

発表者の人数が多くなればなるほど、申請時期の締め切りは、前にさかのぼることになる。しかし、これは理想であって、これまでの大会をみても、国際エチオピア学会のようなメンバーシップのない不特定の研究者を対象とする学会ではなかなか困難である。

## (5) 評価される若い人の積極的参加

第13回国際エチオピア学会を成功裏に終わることができた大きな背景は、中堅の研究者ばかりではなく、院生・学部生といった若い人のじつに献身的な参加によるものといってよいだろう。それは、組織委員会や実行委員会など企画レベルから参加し、大会全体の流れとそれぞれの分担を責任もってやっていったからである。大会期間中のアルバイト的な分担であったら、学生にとっても無味乾燥で、大会のスムーズな流れを期待できなかったのではないだろうか。こうした学会を含むほとんどの事業は、理念や約束事ですすむと思ったら大まちがいがい。もしかしておこりうると予想される出来事にたいして対処できる方法を事前に講じておくこと

後のセッション「エチオピア研究の将来」である。焦点を絞った特別セッションは、「エチオピアにおける土着の持続的農業システム」と「エチオピアにおける中心と周辺の再編成1974-97年」である。このような特別セッションが多すぎると、それに参加・発表できなかった人の不満がでてくる。一方、学術大会の成功度は、懇親会の充実度でしばしばはかれる。参加者がなごやかに交流できることは大会の大きな目的であるが、この点に関してはまちががなくみなさんに満足していただいたと思う。

## (7) 責任分担としての事務局

少なくとも開催3ヶ月間になると、事務局は混乱状態になる。おこるべきことが起これば問題ないのだが、予想できないさまざまな出来事にそのつど判断して対処しなくてはならない。それぞれが自分の責任分担を意識してじつによく対応していただいた。ビザの問題を含み、参加者とこまめに連絡をとっていた多治見陽子さんなどは、大会で参加者とはじめて会った瞬間に、すでに旧知の間柄のようだった。彼女たちは、歓迎レセプションがはじまったときに、「学会はもう終わったと思った」ほどの安堵の気持ちをあらわしていた。大会中も、みなさんに夜遅くまで気をつけていただいた。

## 2) 参加者側からの反応

これは、エチオピア側と他の海外参加者によって異なってくる。

### (1) 「これほどゆきとどいた大会はない」

2003年の第15回国際エチオピア学会の開催



地は、さきの京都における国際委員会でドイツに決定された。そのときの主催者になるハンブルグ大学のジークベルト・ウーリッヒ教授は、そうつぶやいていた。

(2) いくつかのセッションが同時に離れた二会場で行うとは

参加者の都合と忍耐をあわせて、開催日を実質5日間にしぼらざるをえなかった。そのため、同時刻にいくつものセッションが進行した。これまでの大会でも、こうしたいくつものセッションが同時におこなわれ、異なる会場をゆききした。

(3) 政治的すぎた一部の公開講演

これは、おもにエチオピア側からの参加者から聞いた批判である。とくに公開講演のようなフォーマルな場における演者には、質問やコメントはできない。学問の枠組みをこえた過激な政治的発言に関して、エチオピア側から講演終了後じつにつよい不快感があらわされた。このアメリカ在住のエチオピア女性研究者に関しては、要注意人物との忠告を直前になってエチオピア側からきいた。それなら参加予定のアジスアベバ大学の女性研究者に交代していただこうと思ひ連絡をとったのだが、彼女は結果的に大会の参加すら辞退してしまった。事前に演者の学問的評価を把握すべきであったことなど、反省材料として残る。とくに公開講演では、注意を払うべきである。

(4) 民族名をあげたセッションは政治的ではないか

オロモに関する集中した議論が展開できることを期待し、「オロモ・セッション」という特定の民族名をあげたセッションを設けたが、国際エチオピア学会では政治的すぎるとの批判を聞いた。オロモ出身者やオロモを対象とする多くの研究者にはよかったかもしれないが、今後の検討課題として残る。

(5) プログラムを事前にエチオピア研究所にみせなかった

プログラムの主要な構成などエチオピア研究所を含む国際委員に事前に送って了解をとるべきかもしれないが、私の知るかぎりそれをするほどプログラム作成の時間的余裕がないし、主催者側の主体性は十分尊重されるべきである

う。

(6) エリトリアは含めるべきではない

一方、「エリトリアは含めるべきではない」という「政治的」発言が国際委員会でエチオピア所長からだされた。これに関しては、他の委員から異議がだされた。エリトリアは、1991年まで国際エチオピア学会の対象地域として扱われていたし、両者の文化・歴史的関係は切っても切り離せるものではない。今回私たちは、エリトリアからの研究者の招聘を考えていたが、エチオピア経由のビザがおりないとのことでキャンセルせざるをえなかった。

(7) 新しいエチオピア研究ネットワークの設立

一部の国際委員を含めた欧米の研究者は、こうしたエチオピア側による研究領域の政治的介入にたいして深い反発感をいんでいる。彼らのあいだでは、ヨーロッパ・エチオピア学会を設立しようなどといった動きがあった。しかし、エチオピア研究所長は、エチオピア研究の事務局的主導権を失いはしないかという懸念があるのか、そうした動きに反対意見をはさんだ。

## 研究面と組織面からみた展望

(1) 人文社会系から境界領域への展開の可能性

いまエチオピア研究は、大きく変わろうとしている。これまでの国際エチオピア学会においては、歴史学を中心とし言語学や文化人類学・民族学を主要な対象分野としていた。エチオピアは人類の起源と進化の跡づける化石の宝庫であるものの、先史学はこれまでおもに文化省の管轄になっていたため、国際エチオピア学会ではマイナーな位置しかしめていなかった。それは、国際エチオピア学会が、これまでアジスアベバ大学のエチオピア研究所を事務局のセンターとしていたことと関係ある。

すでにのべたように、国際エチオピア学会は基本的に主催者がどういう専門分野の属し、どれだけの関心とネットワークをもっているかによって、大会における参加者とセッションの構成が大きく左右されていた。また、エチオピア研究所を中心とするアジスアベバ大学が、そのつど国際エチオピア学会へ招聘される参加者をかざられた枠内で論文審査をおこない、その合

格者を開催国に推薦していた。そのため、参加希望者の申請資格がほとんど大学内にわりふられていた。したがって、文化省がその発掘権を統括する先史学や考古学はほとんど無視されてきたし、アジスアベバ大学以外の外務省や農林省など他の省庁からの発表希望者は、別な助成をとって参加するか、主催者側の特別招待に依存するしか参加の道はなかった。これは、エチオピアの経済状況からすれば、門戸がきわめて閉ざされている、といえる。

今回の大会では、こうした従来の大学の人文社会系にかぎられた分野をこえて、自然系の分野の研究者を招聘した。現代的課題である農業や環境といった境界領域の分野が、今後どのような形で国際エチオピア学会においてとりあげられていくのか。

## (2) 調査プロジェクトの窓口から

このようにエチオピア側からみれば、国際エチオピア学会への参加は、大学を中心とした「利権」がらみの事業である。エチオピア研究所を中心とした参加者の選考権がこんごどのような展開を示していくのか。そのことは、エチオピア内部における研究の方向とも深くかわっている。

1986年にはじまった私たちの調査プロジェクトは、エチオピア研究所との10年間にわたるアグリーメント「北東アフリカにおける農・牧社会の比較研究」にもとづいていたが、それは96年12月をもってひとまず終了した。このプロジェクトの成果は、アジスアベバ大学の調査・出版局を中心とした評価委員会のもとで慎重に審査され、アグリーメントの更新が検討された。それをもとに、97年3月、あらたなタイトル「環境の土着知識に関するエチオピア諸社会の比較研究」のもとに5年間のアグリーメントがかわされた。この過程で、私たちは従来の人文社会系にかぎらず、自然系の研究者との協力体制をきずくことができた。

純然たる学術調査は、基本的にアジスアベバ大学の調査・出版局の審査をへて認可される。その窓口は、エチオピア研究所をはじめいくつか存在し、それぞれの部局によって条件が異なっている。

ただ、先ほどのべたように、化石や遺跡など

発掘にかかわる調査は文化省が管轄しているし、農業など開発調査にかかわる特定のプロジェクトは、州政府を含む関係省庁が窓口となっている。

1959年に第1回の国際エチオピア学会がローマで開催されて以来、エチオピアにおける調査研究の対象範囲と内容はずいぶん変わってきた。将来この国際エチオピア学会が40年の伝統を誇る枠組みに固執していくのか、それとも現代的な課題も含めた地平線に挑戦していくような役割を担っていくのか、いま大きな岐路にたっているといえよう。

## (3) 「国際エチオピア学会」設立の可能性

将来にわたって、エチオピア研究所がこれまでのように国際エチオピア学会の事務局的センターでありうるか、どうか。こうした疑いの声を、海外のエチオピア研究者のみならずエチオピア側からも、私は耳にした。オロモ・セッションといった特定の民族名をとりあげるのには、伝統的な国際エチオピア学会の性格からよくないと一部のエチオピア参加者が判断するのも、エチオピア国内の政治性がからんでいる、ともいえる。

新しい「国際エチオピア学会」をいつ、だれが中心になって、どのように設立の方向へもっていくのか、いまのところ具体的な構想はない。しかし、第13回大会では過去の大会では予想にもしなかったアイデアが、一部の参加者から非公式ながら提起されたことは、大きな波紋をよぶであろう。あとは、その設立に向けて、どういうネットワークが形成されていくかである。

## 多くの方々に支えられ

すでにのべたように、第13回国際エチオピア学会を京都で開催するようになるなど、1980年代なかばまでまったく想像することはできなかった。オリンピックを開催するためには、開催国においてそれなりの参加者の見通しがなければ、内外から開催のコンセンサスなどえられるものではない。

パリで開催された第10回国際エチオピア学会まで、日本側からの参加・発表者は、ゼロかせいぜい1人であった。アジスアベバにおける

第11回大会の日本人発表者は3人に、ミシガンにおける第12回大会の日本人発表者は6人に、そして京都における第13回大会の発表者はじつに18人にも達したのである。第13回における総発表者における日本人の占める割合は、この10年間で飛躍的に増加していった。

2000年11月、アジスアベバで開催される第14回大会において、日本人研究者がどの程度参加するのか。98年の8月上旬エチオピアを訪れたとき、このことがすでに主催者側の関心にはほっていたのにはおどろいた。それは、エチオピア研究や国際エチオピア学会における日本人研究者への期待が私たちの想像以上に大きくなっていることを、物語っているといえよう。

本大会の目的は、学术交流とは別に「欧米とは別の世界が東洋にはある」ということを海外からの参加者に少しでも肌で感じていただくことであった。このことは、開催中の京都滞在のみならず、大会前の広島・奈良・伊勢志摩のエクスカッションなどによって、短期間ながらその目的を達成することができたのではないかと、思っている。

いまでも、第13回大会の海外参加者から、E-mailをいただくことがある。その一部に「京都に惚れてしまった。ぜひまた訪れたい」といった内容がみられる。また、逆にさきへのべた「エチオピア映画祭」のみならず大会そのものにも積極的に参加した学部学生(京都大学総合人間学部4回生)3人は、1年間休学してエチオピアの西南部にでかけてしまった。

第13回国際エチオピア学会は終わった。それは、私たちの想像以上の成功であった、といっても過言ではなかろう。これも、ひとえに多くの方々に支えていただいた賜である。すでにこれまでの文中で謝辞の意を表してきた方々のほかに、じつに多くの方々にお世話になった。また、財団や企業などの組織のほかに、個人の方々からもご寄付をいただいた。そのなかには、これまで面識もなかった方からの励ましもあった。こうしたご好意のありがたさは、特定の助成のもとではとうてい気づくことのできなかったことである。

別紙にみられるように、寄付していただいたリストだけから見ると、その組織や個人との直接的な関係しか浮かんでこないようにみられ

る。しかし、こうした寄付という結果にいたるまで、なん人もの方々のあたたかいご配慮を介している。この場をかりて、その方々のお名前をあげお礼を申し上げたい。しかし逆にそのことによってご迷惑をおかけすることになるのではないか、気にかかる場所である。いまのところ心に感謝の念をいだきながら、いつか表にあらわしたいと思っている。

開催の準備をしているとき、また開催が終わってしばらくして、エチオピアとの関係で忘れることのできないお二人が他界された。

お一人は、私たちの学問上の大先達者であり、東アフリカ研究に大きな功績を残された富川盛道先生である。ある出会いによって、私たちはそれまで想像もしなかった道を歩むことがあるが、富川先生との出会いは日本の北東アフリカ研究にとっても、私自身にとってもそのように思われる。

もうひと方は、奥田敬和先生である。奥田先生は、日本エチオピア友好議員連盟の会長を長年勤めてこられ、エチオピアとの関係改善にずいぶんつくされてきた、と伺っている。私が直接お目にかかったのは、何年も前に開催された「日本エチオピア協会の夕べ」であった。本大会の特別顧問になっていただいたばかりではなく、開催のための募金を経済界にお願いするために、日本エチオピア友好議員連盟会長としてご署名をいただいている。それは、同二階俊博事務局長、日本エチオピア協会会長福本栄治会長、そして日本ナイル・エチオピア学会河合雅雄会長の連名のもとであるが、署名される前に私の作成した文面になんとか目を通していただき、修正すべき箇所を指摘していただいた。

ここにお二人のご冥福をつつしんでお祈り申し上げます。

「それでは、つぎは何？」という問いかけを、本大会に携わったものそれぞれが心にいただいていることと思われる。10年後、そうした問いかけがどのような形で実を結んでいくのか。

(ふくい かつよし)

第13回国際エチオピア学会実行委員長、  
日本ナイル・エチオピア学会運営幹事)